恋の実験室

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋の実験室

【Ｎコード】
Ｎ５９９４Ｔ

【作者名】
月乃宮

【あらすじ】
大学一年の篠田雛子（しのだ・ひなこ）は、バイト先の生化学実験室で出会った院生・多岐川睦月（たきがわ・むつき）に交際を申し込まれた。研究フリークで変人の多岐川の風変わりな行動に、恋愛初心者の雛子は面食らうばかりで……

Ｌａｂ．１：　告白された　（２／６）（前書き）

このお話は２００８年2月6日～3月１６日にかけてブログ連載したバレンタイン企画小説を改稿したものです。

Lab. 1： 告白された （2／6）

「異性と付き合うのは、実は初めてなんだ」

そう告げられて、本日二度目のショックを受けた篠田雛子（しのだひなこ）は、大学構内の一角にある化学実験室内でフラスコを揺らしている奇人・多岐川睦月（たきがわむつき）をあ然と見つめていた。

多岐川は、フラスコ内のピンク色の液体から目を逸らさずに、淡々とした口調で続ける。

「篠田さんも、今付き合っている人はいないんだろう？　ならば僕と付き合う上で問題無い」

「問題無い！？　大アリですよ！！　いきなり何なんですか、そんな勝手に決めてっ……」

「勝手に決めてない。だから今、こうして君に提案している」

一度目のショックは、この目の前に立つ白衣姿の院生に「付き合って欲しい」と言われた事。

この日、雛子は初めて多岐川とまともに会話した。そもそも雛子は今年文学部に入ったばかりの一年生で、多岐川の所属する理工科、しかも大学院にはまったく縁が無い。

雛子がここ化学棟にいる理由は、キャンパス内で紹介されたバイトのためだった。仕事の内容は主に、教授や院生の使う資料・データ整理、実験器具の洗浄などといった雑用全般。

「さて、決める時間はどのくらい必要？　三日？　それとも一週間？　即答だと感情に任せて決めかねないからな。多少落ち着いてから結論を出した方が、君にとっても正しい答えが導き出せる。ああ、

それから……今のところ君が僕に対して愛情を持てなくても一行に構わないから。むしろ僕をよく知りもしないで愛情を持てる方がおかしい。それは非現実的だ」

雛子はまたショックを受けてしまう……なんてロマンチックから程遠い告白だろうか！（これが告白と呼べるものならば）

深いため息とともに雛子がようやく口にした言葉は……

「……まずはお友達から、でいいでしょうか」

「無難な結論だ。だが即答はやめた方がいい。返事は、また三日後に」

というわけで、今のところ雛子は多岐川と付き合っているわけではないそうだ。

Lab. 2： 質疑応答 （2／8）

ここは某大学院の一角にある生化学研究室。

雛子は目の前に積まれたデータ資料の山と格闘していたが、視線はついつい奥の実験テーブルに向かう人物を追ってしまう……大学院、理工科生化学研究室所属・多岐川睦月。

一昨日、雛子は多岐川に交際を申し込まれたのだ。

雛子は多岐川に返事をしなくてはならない。多岐川によって一方的に決められた約束の日は三日後……つまり明日に差し迫っている。

「あの……多岐川さん？」

「なんだ」

その横顔は電子顕微鏡に向けられたまま、振り向こうとはしない……確かに彼はとても綺麗だと思う。少し切れ長の目に薄い唇、骨ばった長い指先……長めの前髪がサラリと揺れて……。

「何か用か？」

そこで多岐川は、初めて雛子に顔を向けた。その感情が見えない表情に、雛子は少し怖気づく。

「あの、多岐川さんって……私のどこがいいんですか？」

雛子はふっくらした下唇をわずかにすぼめると、おずおずと多岐川の顔を見上げた。多岐川は少し目を細めると、カチャリと細い銀フレームの眼鏡を外して腕を組んだ。

「本当にそんなこと、知りたいのか」
「そ、そりゃあ……」
「想像くらいつくんじゃないか？　男の思考パターンなんて、そう大差ないぞ」

雛子はふと、自分の兄を思い浮かべた。雛子の兄はすでに社会人だったが、学生の時分から少しも変わっていないように思われた。少々口うるさい時もあるが雛子にはとても優しいし、気さくな性格のため友達も多い。

「……お兄ちゃんしか、よく知らないから……」

雛子がくぐもった声でそうつぶやくと、多岐川は再び眼鏡をかけなおし電子顕微鏡に向き直った。

「顔」
「……え？」
「それからスタイル」

雛子は大きな目をぱちぱちと瞬いた。多岐川の長い指先が、繊細なフレームの中央をそっと目の間に押し当てる。

「でも、この服はお兄ちゃんが選んで……」
「服じゃない。その中身だ」
「！」

多岐川は顔をあげ、チラリと流れるような視線を雛子に送った。

「……もし、君が僕と付き合うことになったら」

「は、はいっ」
「僕はいずれ、君に触れることになる」
そのあまりに直接的？な表現に、雛子は顔を真っ赤に染めた。
「そ、そ、それって……身体めあて、とか……」
「それもある」
「！！」
「好きなら触れたいって思うものだろう」
雛子はなんと答えたらいいか分からず、うつむくことしかできない。
「その代わりと言えばなんだが……」
すぐそばで声が聞こえ、雛子はびっくりして顔を上げた。
いつの間にか多岐川が隣にいて、じっと雛子を見下ろしていた。
「君も、僕に触れることができる」
カーッと熱くなる頬を両手で押さえた雛子は、逃げ腰で後ずさってしまう。
すると多岐川は、あっさりと白衣の裾をひるがえして顕微鏡へと戻ってしまった。
「もちろん、触れるのは心が通じ合った時だ。だから当面は心配する必要ない」
「は、はあ……」
雛子は明日、多岐川に返事をすることになっている。

Ｌａｂ．３：　集中するために　（２／１１）

「お先に失礼しまーす」

その日、雛子はいつものように生化学研究室でバイトを終えると、いつものように研究室内にいる院生たちに声をかけた。

「あ、ヒナちゃんオツカレ～」

「もう遅いから、気をつけてね！」

すでに午後八時を回ろうとしているのに、室内には大勢の院生が残っていた。なんでも来月学会があるとかで、皆準備に忙しい様子である。

もちろん多岐川も例に漏れず、いつもの定位置で黙々と追い込みをしていた。

雛子は出口の前でこっそり多岐川の横顔を盗み見たが、視線が合いそうになったので慌てて顔をそらし扉に手をかけた。

すると目の前の扉がパッと開いて、白髭の似合うおだやかな風貌の笹原教授が現れた。

「おっ、すまんすまん。驚かせたかな」

雛子はぶんぶんと首をふると、笹原教授が「ひとりで帰るのかね？」と声を掛けた。

「もう随分暗くなってるから気をつけるといいよ。さっきそこで赤木教授に会ったんだがね、先日女子生徒が帰り道に、裏門の近くで変な男に声をかけられたらしい」

「えっ、ホントですか……」
「裏門から駅までのホレ、あの近道……あの道は昼間でも閑散としてるからね。女の子じゃなくても、夜は通らない方がいいと思うよ」
「はい、分かりました」

雛子はもう一度ペコリとおじきをして部屋を後にした。

いつもなら裏門を通って帰るのだが、笹原教授の話を聞いたあとじゃとてもそんな気になれず、正門へと向かうことにする。

「篠田さん」

多岐川の呼ぶ声を耳にしたのは、正門を出てしばらく行った大通りにやってきた時だった。おどろいた雛子がふり返ると、少しだけ息を切らした多岐川がそこに立っていた。

「あの、何か……」
「駅まで送ろうと思って」

雛子は目を丸くする……数時間前、人気の無い研究室で交わした会話が脳裏に蘇った。
三日前、多岐川に交際を申し込まれた雛子だったが、今日きちんと返事をしたのだ……その答えは「ＮＯ」だったのに。

「……」
「つまり、」

無言でうつむく雛子に対し、多岐川は心持ち早口で話しだした。

「教授のあんな話を聞いたあと、君を一人で夜道を歩かせたら……

このまま研究室に残っていても、僕は気が散って全く集中できないだろう」
「……」
「というのも、君の安否を確かめる術も無いわけだし、君が無事だったと分かるのは君が次に研究室へ来る時だ。そんなに長く待てない。だから送ろうと思った」
「……」
「駅まで無事なのを確認できれば、僕はこのまま研究室へ戻って心置きなく実験の続きをできる。余計な心配も無くなるから能率も上がるだろう……」

そこで多岐川は言葉を切った。
雛子は笑いを噛み殺していた。

「くくっ……多岐川さん、オカシイ」
「……変か？」
「ごめんなさい、そうじゃなくて。心配かけるつもりはなかったんですけど……」
「僕が勝手に心配するのは自由だろう？」

『もしかしたらこの人は頭はいいけど、とてつもなく不器用な人なのかもしれない』……この瞬間、雛子は初めて多岐川に親近感を覚えたのだった。

Lab. 4： チョコレート投入（2／23）

「あ、多岐川さんだ」

友人の言葉に、雛子はドキリとした。構内を歩いていたら、ちょうど芝の向こう側にある道を白衣姿の多岐川が横切ったのだ。手にはファイルのようなものを抱えている。

冷たい風が吹く中、雛子はカラーリングしたばかりの髪を片手で押さえながら歩いていた。春を先取りした桜色の小花模様のスカートに、長い編み上げのブーツ……それを擦り合わせるようにして歩く雛子の姿は実に女の子らしい。

「雛子のコート可愛いよね～。どこで買うの、そういうの？」
「髪も猫っけでふわふわだし、雛子はホントそーゆー女の子っぽい服が似合うよね」
「……やっぱり子供っぽかったかなぁ」

雛子は小さくため息をついた。友人は「可愛い可愛い」となだめてくれるが、雛子は本当のところ、もっとカッコイイ大人の女性に憧れているのだ。

でも、童顔で小柄な雛子には所詮大人っぽい服は似合わない。友人らにしてみれば、雛子はそれで十分カワイイのだから問題ない、うらやましいとすら感じているのだが……皆、無いものねだりをしてしまうのが世の常である。

「髪は毎回お兄ちゃんに、無理やり美容院へ連れてかれるんだもん。お母さんは子供っぽい服ばかり買ってきちゃうし」
「相変わらず雛子んちは過保護だよね」

「うんうん、うらやましいぐらい？　でももう大学生なんだから、格好ぐらい自分で決めたいよね」

にやにや笑いを浮かべつつ明らかにからかっている口振りの友人二人に対し、雛子はべーっと舌を出すと「もうバイト行くから。じゃあね！」と小走りに去っていく。

こんな様子も、ますます雛子を女の子っぽく見せてしまうのだが……天然でやっている当人はそれに気がつかない。

「多岐川さん」

研究室の前で多岐川に追いついた雛子は、息を切らせて手をふった。多岐川はドアノブをつかんだ手を止めると、いつもの冷たいポーカーフェイスで雛子を見つめた。

「よかったぁ、今日は会えて」

「……僕に何か用？」

「うん、これ」

そう言って、雛子は小さな手製のラッピングを差し出す。

「チョコレートです。本当は１４日に渡そうと思って、ずっと持ち歩いていたんですけど……試験あったからバイトこれなかったし、昼間はちっとも多岐川さんに会えなかったから」

「……１４日って、今日は２２日だろう。一週間も持ち歩いていたのか？」

「そうですけど」

雛子が首を傾げると、ゆるめに巻かれたブラウンの髪がふわりと宙を舞った。多岐川は眩しそうに目を細めると、手の中の小さな包

みを見下ろす。

「チョコだから、たぶん腐ってないはずです」

「……」

「多岐川さん、甘い物嫌い？」

多岐川は無言のまま、相変わらず包みを見下ろしている。丁寧なラッピングをほどこされた包みには、細いピンクと白のリボンが掛けられていた。

「でもホント、今日会えてよかったぁ～。金曜日だから、今日を逃すと来週の月曜日になっちゃ……」

ぐいっと腕をつかまれて、雛子は研究室の奥にある資料室に引っ張り込まれた。

「ど、どうしたんですか、多岐川さ……」

「悪いけど、こんなものをこんな風に渡されると……僕は期待してしまう。君は一体どういうつもりだ？」

ブラインドの下りた薄暗い室内はほこりっぽかった。ドアを背にした雛子は、両手で挟まれるようにして覆いかぶさるように見下ろしてくる多岐川を見つめる。顔のすぐ横に押し付けられた両手からは体温が伝わりそうなのに、見下ろしてくる冷たい視線がなんとも居心地悪い。

「そんなに、おびえないで欲しい」

「あ・あの……」

スッと身体を引いた多岐川は、手にした包みを指先で目の高さま

でつまみあげると「ま、いいか」と小さくつぶやいた。

「髪型、変えたのか？」

「え？」

とつぜん話題が変えられた。

「えっと、うちのお兄ちゃん……兄が、美容院に連れてってくれて」

「そうか」

「私は、こんな子供っぽいの、本当はちょっと……」

「似合っている」

そう言って多岐川が手を伸ばしてきたので、思わず雛子は身をすくめてしまう……すると雛子の耳元でパチン、と音が響いた。続いて室内の明かりがつく。

「君はそういう格好が良く似合う」

――なんだ、電気つけようとしたのか。びっくりした……。

自分がおかしな勘違いをしてたことに気づいた雛子は、熱くなる頬を両手でかくしてうつむいた。多岐川の顔をまともに見れなかった。

やがて聞こえてきた小さなため息につられ、雛子は顔を上げた。気がつくと多岐川はすでに扉の前にいて、今まさに部屋を出て行こうとしているところだった。

だが多岐川は扉に手をかけたまま開こうとせず、眉をひそめ、少しだけ困った様子で視線を彷徨わせていた。

「またそういう態度……君は本当にタチが悪い」
「はあ？」
「でも、まあいい」

それだけ言い残し、ようやく多岐川は扉を開いてさっさと出て行ってしまった。その場にひとり残された雛子は、なにがなんだか分からないまましばらくぼう然としていた。

果たして多岐川はチョコレートを喜んでくれたのか？　雛子は首をひねらせた。
女の子の友達に毎年あげる手作りの『友チョコ』。父親と兄以外の男性で、初めてあげた手作りチョコ……少しはよろこんでもらえただろうか？

Ｌａｂ．５：　感想求む（２／２７）

平日の市立図書館は、いつものように空いていた。
雛子が講義の合間を縫っておとずれる、お気に入りスポットがここにある。

館内の奥まった場所にしつらえた窓際の席は滅多に人が来ず、ただ冬のやわらかい日の光だけが射し込んでいる。古くなって少しばかりクッションが柔らかすぎるソファーと、囲むようにしてそびえる法律書の陳列棚が、ほんの三畳ばかりのスペースを埋めているのだ。

雛子はソファーに座るとぬいだコートをひざにかけ、さっそく手にした本を開いた。。
学校の図書館は常に学生で溢れているし、カフェテラスも同様である。そんな中、この静寂な空間はまさに穴場だった。

西洋文学史の課題レポートのために借りた本は、少々睡魔を呼ぶ効果がある……じっとページをながめていると、知らずうちにウトウトと、まどろむようなしあわせな睡魔が雛子を包みこんでゆく。

――ハッ、いけない、いけない！　レポート今夜中に仕上げるんだから……。

雛子は瞼をこすりつつ、ふと窓ガラス越しに裏庭へ視線を移すと……寒そうなテラス席に、見知った横顔を見つけて覚醒した。

――多岐川さん！？

慌ててコートを着こんで裏口からテラスへ出てきた雛子は、マフラーをしっかり巻きつけて熱心に本を読む多岐川の元へ駆け寄った。

「多岐川さん！」

名前を呼ばれた多岐川は頭を持ち上げ、少しうつろな目で銀色のフレーム越しに雛子を見やると「ああ、君か」と小さくつぶやき、再びページに目を落とした。

「寒くないんですか？　こんな外で！」

「寒いよ。だからいいんだ」

「え？」

「目が覚める」

心なしか青白い顔色の多岐川に、雛子は「でも……」と迷ったように口ごもる。

「いつからここにいるんです？」

「……今何時だ？」

「ええと、二時過ぎです」

「じゃあ三時間ぐらいだな。昼前にきたから」

雛子は驚いて目を丸くする。

「あの、お昼は」

「朝食べたから必要ない」

「そんな……多岐川さん、なんか顔色悪いですよ？　それ、学会のための資料ですか？　ご飯は一日何回食べてます？　睡眠はどのくらい取ってます？」

「……そんな矢継ぎ早に質問するな。食事は足りている。睡眠も大

体三時間は取るようにしているから大丈夫だ」
「さ、三時間……私なんか、七時間は寝なくちゃキツイのに……！」
雛子は手にした鞄をぎゅっと前で抱きしめた。それから「あ」と声を出すと、今度はゴソゴソと鞄の中を探り出す。
やがて赤いギンガムチェックの包みを取り出すと、相変わらず本から顔を上げようとしない多岐川の前に突き出した。

「これ、どうぞ」
「……なんだ、それは」
「お昼のサンドウィッチ。本当は食べるつもりで朝作ったんだけど、友達の学食につき合ったので食べ損ねちゃったんです」
再び多岐川が顔を上げた……その両頬が心なしか細くなっている気がした雛子は『これは無理にでも食べてもらわないと！』と強く思った。

「卵とハム。それからチキンとトマト……自信作なんです！　だから少しでも」
「分かった」
多岐川は拍子抜けするぐらいアッサリ承諾すると、カチャリ、と眼鏡を外して本を閉じ、雛子の手から包みを受け取った。

「……座ったらどうだ。寒いけど」
そう言われ、雛子は多岐川の隣の椅子を引いてそっと腰を降ろす。座ってみると、ちょうど外壁が風除けにはなっているみたいだが、それでもやはり寒いことには変わりない。

『やっぱり、多岐川さんって変わってるかも』……そう思いつつ、しばらく多岐川が食べる様子をながめていた雛子だったが、ふと思い出して口を開いた。

「そうだ、チョコレート。大丈夫でしたか？」

「大丈夫って、どういう意味だ」

「味、少し甘すぎたかなぁって……中のガナッシュ、ちょっと砂糖加え過ぎちゃって」

「……さあな。食べてないから」

多岐川の予想外の返答に、雛子は絶句してしまった。

まさか食べないなんてことあるはずない、と思っていたのだ。

――そんな……せっかく作ったのに。

雛子が顔をしかめて、文句の一つでも言おうと口を開きかけたその時。

「勿体無くて」

抗議のために持ち上げかけた手が、所在無げに冷えた木製のテーブルの上に落ちた……まるでたった今目が覚めたように、雛子は瞬きを何度も繰り返した。

「でも、これも美味いから……チョコレートもそうだろう、きっと」

「……」

「なんだ、その顔は」

雛子の表情に気づいて、多岐川は微かに眉を寄せた。

それから雛子は、嬉しさ半分、困惑半分といった感じで苦笑を漏

らす。

「多岐川さん、やっぱり変」

「そうか？」

「チョコレート、また作ってきます。だから……この次までに、味の感想聞かせて下さいね」

Lab. 6： 目撃（2／28）

カラン、と音を立てて扉を開けると、柔らかい日差しが差し込む奥のテーブル席から明るい声が響いた。

「ヒナ、こっちこっち」

雛子は名前を呼ばれた方へ足早に向かうと、華奢な籐の椅子を引きながら口をとがらせた。

「も〜、大きな声で名前呼ばないでよ、お兄ちゃん。恥ずかしいじゃない」

「ゴメン、つい……ま、座った座った」

篠田久司（しのだひさし）は、くったくのない笑顔を雛子に向けると、楽しげな様子でメニューを開いて見せた。いつもながらカジュアルでセンスの良い服装に、少し明るめの茶色に染めた髪はワックスで軽くセットされている……雛子の面立ちによく似た、この七つ違いの優しい兄が雛子は大好きだ。

「カワイイ店だね」

「だろ？　ヒナ、気に入ると思ってさ。会社の女の子から教えてもらったんだ」

「なに〜、彼女？」

「そんなんじゃないって。紅茶はどうする？　ヒナ、ストロベリーの紅茶好きだったろ？　ケーキは日替わりらしいから、向こうのガラスケースから好きなの選んでくるといいよ」

「うん」

雛子は嬉しそうに笑顔をほころばせると、口の端から細い八重歯がちらりと覗いた……それがまた、たまらなく可愛らしく久司の目に映る。今日の雛子は、久司が先日買ってきた春らしい淡い若草色のボレロを着ている……黒のワンピースに映えて、雛子の清楚さが引き立つというものだ。

久司は満足げな笑顔で、ガラスケースをのぞいている雛子の様子を見つめた。久しぶりの貴重な有給を、自分の溺愛する妹とお茶するために使う……久司にとって、雛子と過ごす時間は癒しの時間でもあった。

「お兄ちゃん、自分のケーキはもう選んだの？」
「ヒナの食べたいのに合わせるよ。そうすればヒナ、好きなの二種類食べれるだろ？　それとも他にも食べたいものがある？」
「そんなに食べないよ。太っちゃうもん」

そう言って口をとがらせる妹を見て「うちの妹ほどカワイイ女の子はそういないよな」と思ってしまう久司は、自他共に認める重度のシスコンだった。

「最近学校はどうだ？　バイト始めたようだけど、帰りとか危なくないか？」
「平気だよ。遅くなる時はバイト先の人に駅まで送ってってもらえるの」
「バイト先の人？」
「うん、院の人でね、『心配だから』って、親切だよね」
「親切……」

久司はかすかに眉を寄せると、とたんに落ち着きのない様子でアイスコーヒーをストローでカラカラとかき混ぜた。

「帰りって何時頃になるんだ？　何なら俺、ヒナのバイトが遅い日は迎えに行ってもいいぞ？　時間が合わない日なら、母さんか父さんに……」
「何言ってるのよ、お兄ちゃん！　私もう大学生だよ？　それにさっき言ったように、バイト先の人が送ってくれるんだから」
「そのバイト先の院生？　そいつ、ちゃんとした人なのか？」

雛子は一瞬、多岐川の顔を思い浮かべて首をかしげてしまう。
ちゃんとした人だが、雛子にとっては「いわく付き」と言えなくも無い……。

「研究室でも、一番頭良い人だよ」
「頭のいいヤツって、変なのが多いからな。ヒナも気をつけろよ？　できるだけ女の友達と一緒に帰るようにしたら？　あんまり遅くなるバイトなら、やっぱり辞め」
「やだよ、そんな！　もう、皆そろって心配症なんだから！」

ふくれっ面の雛子が窓の外に目をやると……道の向こう側に多岐川の姿を見つけた。

「あ……」
「ヒナ？　どうした？」

その多岐川の腕には、女の腕が絡んでいた……次の瞬間、寄りそうような二人の影は人ごみにまぎれ、あっという間に雛子の前から姿を消した。

Ｌａｂ．７：　お返し調査（３／５）

「は？」
「だからホワイトデーのお返しは何がいい、と聞いている」

いつものバイト帰りの道、駅まで送ってくれる多岐川と並んで歩いていた雛子は、突然そんな事を言われてびっくりした。というのも、あのチョコレートは義理チョコならぬ『友チョコ』だからだ。

「えっと、気にしなくていいです」
「どういう意味だ」
「だって、ほんのお礼のつもりだったから……」
「お礼？」

多岐川はたとえ実験の佳境でも、雛子が帰り支度を始めるとすぐに手を止める。そして白衣の上にコートを羽織ると、研究室に残っている他のメンバーの冷やかす声もスッキリ無視して雛子を駅まで送るのだった。

多岐川は完璧なまで周囲の目を気にしない。そして、いつでもマイペースで物事を進めるのだ。
自分を持っている、と言えば聞こえはいいが、ある意味とても図太いとも言えなくもない。

「僕自身でも、ある程度リサーチしたんだ」
「リサーチ？」
「結果、一般的にお返しにはマシュマロ、クッキー、キャンディーなどが用いられるようだな。恋人というスタンスだと、花や食事、その他プレゼントなど自由みたいだが、僕達はそんな関係ではない

から、そのやり方は妥当ではない」
「はあ……」
「だからここは当たり障りの無い、食べ物が一番無難だろう。物だと手元に残ってしまうのが厄介だろうし。君は何のお菓子が好きなんだ？」
「……」

相変わらずの多岐川ペースに、雛子は言葉に詰まってしまう。

「今僕があげた種類以外で、特に好みのお菓子があるのならそれでも僕は構わない」
「そ、そんな風に聞かれても困ります」
「……」
「だから」

雛子が足を止めると、隣を歩く多岐川も足を止めて雛子に向き直った。
車道側に背を向けて立つ多岐川の背中から、道路を行き交う車のライトがチカチカと光っており、雛子は眩しさに眉をひそめるようにして目を細めた。

「怒っているのか？」
「？　怒ってなんかいませんよ……」
「お返しはどうする」
「お返しなんか、いいんです」
「なぜ」

車のハイビームに雛子は思わず顔を背けると、多岐川と視線を合わせないままつぶやいた。

「だって……多岐川さんカノジョいるでしょ」
「何の話だ？」
「この間、腕組んで歩いているところを偶然見かけたんです。変なの。カノジョいるのに、私に構うなんて。多岐川さん、変」

多岐川から首を傾げる気配を感じたが、雛子はそのまま視線を合わせることなく唇をかんだ。なんだろう、このイライラする気持ちは……雛子は自分の中に生まれた、なじみのない感情にとまどっていた。

「彼女なんかいない。異性と付き合った事はない、と君にも話しただろう」
「嘘。だって見たもの」
「じゃあきっとその女は、彼女じゃない女だ」

雛子は目を丸くした。

「ただの、身体の関係」

雛子は信じられない、という表情でぽかん、と口を開く。
そんな雛子の様子をしばらく無言で見つめていた多岐川だったが、やがてそっと呼吸を吐いた。

「冗談」
「……全然、笑えないんですけど」
「篠田さんがどんな顔をするか試してみたくて」
「……悪シュミ」
「気分を害したなら謝る。悪かった」
「別に、あやまったりしなくていいです」

多岐川は雛子を促すようにして、再び駅への道を歩き始める。雛子は歩きながらも、まじまじと多岐川の横顔を見上げていた……細くとがった顎に、酷薄そうな唇の端が少しだけ持ち上がっている。

「昔そんな事もしてたが、君と話すようになってからはやめた」

「やめたって……」

「篠田さん、そういうの嫌いだろう？　だからこの間、最後の女を清算してきたんだ」

その夜、二人は無言のまま歩き続けた。

Lab. 8： 同窓会 （3／9）

週末の夜、雛子は久し振りに高校時代の友達と食事に出かけた。
待ち合わせのレストランの席へ向かうと、懐かしい顔ぶれが三つ……その一人が手を振った。

「雛子、こっちこっち！」
「真知子ちゃん、由紀ちゃん！　それから小町ちゃんも～」

雛子がテーブルにたどり着くと、一人だけ見知らぬ顔があった。バサバサとルーズにまとめた艶やかな黒髪が印象的な、ひょろりと背の高い男だ。雛子は首を傾げる。

「あれ、雛子分からない？　委員長だよ」

真知子はふっふっふーと意味深な笑顔を浮かべる。

「えっ、委員長って……田村君！？」
「久しぶりだね、篠田」

雛子が驚くのも無理もない……クラス委員だった田村は、その人柄と成績の良さでクラスメートの信頼も厚かったのだが、黒ぶち眼鏡でいつも本ばかり読んでいる存在感が薄い生徒だったからだ。

「由紀と同じ大学なんだよ、田村。すっごく変わっちゃってさ～、ねぇ？」
「そうかな……俺、中身は全然変わってないと思うけど」
「外側がそんだけ変わっていれば、十分変わったってことよ。何コレずるいよね～、眼鏡取ったらこーんな爽やかな好青年だったなん

てさ」
「やだぁ真知子ちゃん、好青年なんて古臭い～。でも確かに田村は反則だよ。ね、雛子？」

真知子の隣でケラケラと笑う由紀に、雛子は目を瞬いて田村を見つめた。
印象こそ薄かったが、たしかに目の前に座ってグラスの飲み物をすする田村は、雛子の記憶にある田村とは似ても似つかない。

「……そんなに見るなよ」
「え？」
「篠田、じろじろ見すぎ。俺そんなに変わってねーって。コンタクトにしただけ」
「あ、うん……」

田村の顔が、心なしか赤くなる。それに気づいた隣の小町は、少しだけ微笑んで目を伏せると雛子に取り分けた料理の小皿を差し出した。

「ほら、雛ちゃん」
「あ、うん。ありがと。わぁ～美味しそう！　私、お腹ペコペコだったんだぁ～」

無邪気にはしゃぐ雛子を、田村はしばらくの間じっと見つめていたが、やがて我に返ったように料理に箸を伸ばした。

食事の後カラオケへ行こう、という話しになり、雛子たち一行は夜の街を歩いていた。
皆のうしろで並んで歩く雛子に対し、田村は申し訳なさそうに切り出した。

「今日は無理に同席しちゃって、悪かったな」
「え、何の事？」
「いや、お前ら久しぶりに集まったんだろ？　仲良かったもんな。小町に誘われて、つい飛び入り参加しちゃったけど」
「私は田村君にも久しぶりに会えてうれしかったよ」

田村はちょっとうつむくように視線を落とすと、乾いた唇を手の甲でこするようにしてつぶやいた。

「あのさ、俺……どうしても篠田に会いたかったんだ」
「え？」
「篠田の事、俺ずっと……」

夜の喧騒にまぎれて聞こえた田村の告白に、雛子の足は自然止まってしまった。
遠くから「二人とも早く～」という真知子の声が聞こえてきたような気がしたが、雛子はその場を動けずに立ちすくんだままだった。

「また、会ってくれるかな」

田村はそう言うと、雛子の顔を熱っぽい目でじっと見下ろした。

Lab. 9： 震える （3／11）

雛子は月・水・金の週三回、つまり一日おきに研究室のバイトに行く。

今日は火曜日なのでバイトの日ではなかったのだが、その研究室の顧問である笹原教授に頼まれた資料整理を手伝うために臨時で手伝いに来ていた。

いつもより人の出入りが少ない部屋で、雛子は笹原教授の指示をあおぎながら黙々とファイルの整理を行なっていた。

「私がアナログ人間じゃなければ、もっとコンピューターを活用できるのだがね」

苦笑交じりにそう言う笹原教授に対し、雛子はぶんぶんと首をふる。

「私もコンピューター苦手ですもん。紙の方が、なんか安心できますよね」

「すまないね。ああそうだ、代わりに明日はバイトお休みしてくれて構わないよ。どうせ学生らも、学会の大詰めでバタバタしてるだろうし」

そういえば、と雛子は研究室を見回した。

「今日は多岐川さん、来てないんですね」

「多岐川なら、第二実験室にこもっとるよ……彼はすぐ根を詰めるからね。あまり無理せんよう、篠田さんからも言ってやってくれるかな」

「私から、ですか？」
「私が言っても意地になるというか、言う事聞かんのでな」
『私が言ったら、尚更意地になるよ……』と雛子はため息をついたが、それでも気になって第二実験室の様子を見にいくことにした。
蛍光灯の灯りが青白く照らしている実験室の片隅（かたすみ）で、多岐川は膨大な量の資料と本に埋もれながら電子顕微鏡をのぞきこんでいた。雛子がドアを開けても、全く気づいてない。
雛子は『邪魔しちゃ悪いかな』と思ったが、このままでは恐らくいつまで経っても多岐川は動かないだろう……雛子は思いきって、ドアを開いたままノックした。
ユラリと顔をあげた多岐川が、不審そうな顔で雛子を見やる。
雛子は一瞬ひるんだが、気を取り直して笑顔を浮かべた。
「コーヒー飲みませんか」
「……いらない」
「じゃあ、紅茶でも？　それともジュース買ってきましょうか」
「何も欲しくない」
多岐川はキッパリと言いきると、再び顕微鏡に向き直ってしまう。
青白い顔に少し長くなった前髪がパサリとかかっていて、不健康そうなことこの上ない。薄い唇は色味が無く、眼鏡のフレームを微かに持ち上げた指はやせ細り、骨ばっていた。
「あのう、学会っていつなんですか」
「……今週末」
「失礼ですけど、間に合いそうなんでしょうか？」

「……間に合わせる」
「でも、ちょっと休む時間くらいはあるんでしょ？」
雛子は扉を閉じると、多岐川のテーブルまでやってきて椅子を引いた。
丸いスツールの椅子はギシリときしみ、雛子は少しの間ギシギシ、と手持ぶさたに音を立てて椅子をゆらしていた。
やがて、雛子はうつむいたまま小声でささやいた。
「おせっかいですか……休んでください、なんて」
「……」
「私、心配です。多岐川さん、いつか倒れちゃう……そしたら学会成功しても、身体壊しちゃって結局は後悔することになるんですよ」
「後悔？」
ギッ、と雛子は椅子を止めた。
「苦労しても、倒れてしまったら……後が続かなくなっちゃう」
「僕は倒れたりしない」
「そうやって体力を過信している人が、急にバッタリ倒れるんですよ……多岐川さん、そんなに研究が好きなんだから、ずっと続けてもらいたいです。今の多岐川さん、いつ倒れてもおかしくない顔してる」
そこで雛子は言葉を切ると、初めて多岐川の顔を見上げた。
そして一瞬、息を飲む。
多岐川はいつものポーカーフェイスだったが、どういうわけか雛子にはその横顔が、ともすれば泣き出しそうな風に見えたからだ。

多岐川は無造作に髪をかき上げると、そっぽを向いたまま眼鏡を外す……その口元が緩慢に開いた。

「君はそうやって、人の世話焼くことが趣味なのか？」

「趣味なんかじゃありません、ただ多岐川さんが……」

「僕が？」

カチャリ、と折りたたんだ眼鏡がテーブルに置かれ、雛子はゴクリと息を飲んだ。

こんな状態でも、なぜか多岐川は非常に魅力的だった……整った顔はもちろんの事、何気ない一連の動きでさえ優美に映る。

なぜだか雛子は、そのポーカーフェイスを崩してみたい衝動に駆られた。

「私が今……ここでキスして、と言っても、手を止めてくれないですか」

多岐川の瞳が揺らいだ。

雛子は口を閉じると、沈黙に身を委ねる……やがて多岐川はポツリ、とつぶやいた。

「君は、本当にずるいな……」

多岐川の艶を含んだような視線が、雛子のそれを絡み取る。

その瞬間、雛子の心臓の鼓動が壊れそうなくらい激しくなった。

伸ばされた手が頬に触れても、雛子は逃げようとは思わなかった。

「震えてる……」

骨ばった親指の腹が雛子の唇を、まるで確かめるような動きで慎重になぞっていく……そして唇の上を滑るその指先からも、微かな震えが伝わってくるのだった。

Lab. 10： 囚われた心（3／14）

「どうしたの、篠田」
「えっ……」

雛子ははっとして顔を上げると、目の前には柔和な表情だが苦笑を浮かべている田村の顔があった。優しく包み込むような視線にさらされて、雛子はたじろく。

朝から降り続ける雨はあがったり止んだりと不安定な空模様で、ちょうど今の雛子の心境を物語っているようだった。

大学のキャンパスにほど近いカフェで一緒に丸テーブルをかこむ田村は、コーヒーを押しやって雛子を嬉しそうに見つめている。

「そんなに、見ないでよ」
「ん？　この間の仕返し……なんてね」

雛子の困った様子に、田村は頬杖をついてクスクス笑った。

「田村君、なんか変わった……」
「この間も言ったけど、そんな変わってないよ。特に篠田の前にいると、あの頃から俺全然変わってねーなぁってしみじみ実感するし」

雛子は顔を赤らめながら「やっぱり変わったよ、田村君」と小さくつぶやいた。どちらかというと控え目で、シャイなイメージが強かったクラス委員長が雛子の記憶にある田村なのだ。
こんな風に素直な気持ちをぶつけてくる田村といると、雛子は見知らぬ人と話しているようで面食らってしまう。

「篠田、今付き合っている人いるの？」
「え、あ……」
「あ、いるんだ？」
「ううん、違うの。付き合っている人はいないよ。でも……」
雛子は脳裏によぎった、三日前のあの夜を思い出していた。

◇　◇　◇

唇をすべる指先が震えていた。
ひとけのない第二実験室の片すみで、多岐川は目の前に座る雛子に覆いかぶさるようにして立っていた。
吐息が聞こえてきそうな距離間。
雛子は息を殺し、目をこらして多岐川の目を見つめる……そらしては負けてしまうと思った。
多岐川の瞳には憂いと色気がにじんでいた。本気でキスされると思ったが、しかし多岐川はぱっと身体を引き、白衣の背中を向けてしまった。
「僕を試すのは、やめた方がいい」
「……え」
その肩が一瞬震えたように見えたのは、雛子の錯覚だろうか。
「結果に、責任取れない」

「多岐川さん……」
「君に嫌な気持ちもさせたくない」
ガタン、と雛子が立ち上がった。
「私が嫌な気持ちって……多岐川さん、私のなんの気持ちを知っているっていうんですか！？　どうしてそうやって、いつもいつも私を突き放すような事ばかり……それなのに、どうして」
雛子は涙を滲ませて、スカートの裾を両手でぎゅっと握った。
「どうして……そんなに私の気持ちを混乱させるの」
多岐川はテーブルから眼鏡を取り上げると、相変わらず背中を見せたままそれを掛け直した。
「もう、出て行ってくれないか」
「多岐川さん……私まだ話が」
「そろそろ日が暮れてしまう。今日は君を送れないから、早く帰って欲しいんだ」
「……」
雛子はぎゅっと奥歯を噛みしめた。
「多岐川さんのバカ！」
そう言って、雛子は実験室を飛び出していった……。
◇　◇　◇

「篠田？　どうしたの」
「あ……」
「これで二度目だ。何、心配事でもあるの？」

田村の表情が心配そうに曇る。
雛子は急いで「なんでもない」と首をふると、つくろい笑いを浮かべた。田村の顔は晴れなかった。

Lab. 11： 最終結論 （3／17）

一番かったるい月曜日の最終講義を終えたあと、荷物をまとめている雛子にクラスメートの友人・麻美が声を掛けた。

「雛、これからバイト？」

「うん、でもその前に何か食べたいなぁ」

「じゃあ外へ行こうよ……ところで雛、先週の金曜日にデートしてたでしょ」

麻美はニコニコと無邪気な笑顔を雛子に向ける。雛子は困惑気味に眉をよせた。

「律子たちから聞いたの。カフェでサワヤカ系の男の人とお茶してたって～」

「ああ、田村君のことかぁ。デートだなんて、そんなじゃないよ」

「そうなの？」

「うん、『時間があったらちょっと会わない？』って言われたから、カフェで待ち合わせてお茶飲んだだけ」

「やあだ、雛ってば。そーゆーのをデートって言うんだよ！」

あきれた様子の麻美に、雛子は少しあせった。

「相手の子もかわいそーに」

「そんなんじゃないってば。田村君は……・あの男の人のことだけど、高校のクラスメートだったの。この間久しぶりに会ったから、ちょっと連絡取るようになっただけで」

「あのね、そういうことからお付き合いが始まるんだって。高校時代の友達が彼氏になったって、よくある話しじゃない」

「だからそういうんじゃ……」
「じゃあ雛、他に好きな人っていたりするの？」
雛子はぐっと言葉につまる。心の中で『またその質問なの！？』と多岐川の顔を思い出した。そしてさらに顔をしかめた。
「雛ってさ、もしかして『つき合って下さい』って言われて初めて、おつき合いが始まるものだとか思ってたりする？」
「だって、じゃあどうやって友達付き合いと区別すればいいの！？」
「うーん、そう言われると説明しにくいけど……たとえば『つき合って下さい』なんてイキナリ言われても、単純に『ハイ、いいですよ』なんてなると思う？」
「……」
「高校時代の告白って、単純だよね。呼び出して告白して、それでつき合って……ま、うまくいく人はいくだろうけど、大抵はただ『言いたかった』だけじゃない？　自己満足の世界だよね」
雛子は段々落ち着かない気持ちになってきた。
多岐川も雛子に正面きって『つき合って欲しい』と告白した人だ。確かにあの時、雛子も単純に『ハイ、いいですよ』と言えなかったではないか。
なんで多岐川は、いきなり雛子に『つき合って欲しい』なんて言ったのだろうか。もっと友達になってからとか、言うタイミングを後にすればよかっただろうに……麻美の言うとおり、これじゃまるで断られるために告白みたいだ。
――それとも、最初からあきめるつもりで……？
「……あ、雛子？」

「ゴメン、私ちょっと早目にバイト行くことになってたんだ……もう行くね」

多岐川はすでに研究室にきていた。
ＰＣのモニターを見つめながら、指先を休まず動かしている。雛子はちょっと迷ったようにしていたが、やがて決心したように口を開いた。

「多岐川さんって、悲観主義？」

ちょっと意外な様子で、多岐川はモニターから視線を外すと雛子に振り返った。

「今、なんて？」
「多岐川さんって悲観主義なの？って聞いたの」

多岐川は腕を組むと、椅子の背にギシリと寄りかかった。

「どうしてそう思う？」
「結果を知っててワザと私に『つき合って欲しい』なんて言ったから……私が断るって、本当は初めから予想してたんでしょ？」
「……」
「ねえ、どうして？　なんでもっと友達になってから言わなかったんですか。その方が、ずっと自然じゃないですか。よく知らないのに、それであんな告白……そんなの意味不明です」
「僕は……」

雛子はさらに多岐川につめ寄った。

「三日間考えてから答えを聞かせて欲しいだなんて……そんな時間があったら、よけい冷静になって『よく知りもしない人と、いきなりつき合えるはずない』って思っちゃうじゃないですか」

「そうだな」

「わざとですか、やっぱり」

雛子の追及に、多岐川はモニターから視線を外してため息をついた。

「そうだ。君に断られると知っててわざと告白した」

「どうして、そんな……」

多岐川は、いつもと違った苦笑を漏らす。あきらめと、妙な確信をもった笑いだ、と雛子は思った。

「僕は研究ばかりやってる。ここ数年、それしか興味がなかったからだ……休日はたいてい研究室にこもっていたし、ほとんど大学と自宅の往復しかない。他にはたまに図書館へ出向くくらいだ」

雛子は『それは何となく想像つくなぁ』と、心の中で苦笑気味にうなずいた。

「だから、そんな僕をよく知ってもらって、君が僕のどこに魅かれるいうんだ？　僕は異性とつき合った事が無いと君に話した。それは本当だ。だからどこへ君を連れていけばいいのか、どうすれば君によろこんでもらえるのか分からないんだ」

多岐川はもう一度ため息をつくと、疲れた様子で額にかかる髪をかきあげた。

「それでも……どうしても気持ちを伝えたかった」

「多岐川さん……」

「いっその事キッパリ振られれば、あきらめがつくと思ったんだ」

多岐川は投げやりな様子でユラリと立ち上がると、強い意志を持った瞳で雛子に対峙した。。

「やっぱりもう一度言った方がいいみたいだ……篠田さん」

「は、はい……」

「『僕とつき合って欲しい』……だめだろうか」

雛子はまじまじと多岐川の顔を見つめた。ちょっと緊張して、かたくなった表情が……好きだと思った。

「ハイ、いいですよ」

「……」

「あれ？　『お願いします』の方がいいのかな？」

意表を突かれた様子の多岐川は、手の甲で口もとをおさえると焦ったように視線を泳がせた。

「僕を試すのは……」

「試してなんかいませんよ。私、ここ一ヶ月ぐらい多岐川さんのこと見てきました。なんか、気になるんですよね、多岐川さんって……ほっとけないというか」

「……」

「目を離せないというか……好きというか。それで、つき合いたく

なりました」

明るく笑う雛子を、多岐川は観察するような目で注意深く見つめている。

「ね、多岐川さん。学会もう終わったんでしょ？　だから今週末出かけませんか」

「どこに？」

「うーん、一緒に決めませんか？　多岐川さんと私が行きたいところがいいです」

多岐川は首を振った。

「君が出かけたいところでいい」

「だめですよ、一緒に決めなくっちゃ。どこがいいかなぁ……あ、多岐川さん、遊園地って行ったことあります？」

「……小さい頃なら」

「じゃ、久しぶりに行きましょ。えーと、やっぱりＴＤＬかな。あ、でもこれじゃ私の行きたい場所になっちゃうか……」

「いいよ、その場所で」

そこで多岐川は大きな笑顔をみせた。

「君の行きたい場所に、僕も行ってみたくなったから」

雛子はあっけに取られた。多岐川は笑顔のまま、不思議そうに首をかしげる。

――多岐川さんが全開で笑ってる！　初めて見た！！

好きという気持ちが、どんどん膨らんでいく。

（エピローグへつづく）

エピローグ　（3／19）

「ひ、ひ、ヒナッ！　母さんから聞いたけど、今日で、で、デートするんだって！？」
「お兄ちゃん、何でどもってるの？」

火曜日、雛子は朝早くから熱心にお弁当作りをしていた。
残念ながら雲ってしまったが、心は晴れ渡っているから大丈夫。
始終ニコニコ顔で上機嫌の雛子のまわりには、心配症で口うるさい兄が一人……。

「ヒナ、今日は午後から講義あるんだろ！？」
「エへへ、休講になったんだ～。本当は日曜日に出かける予定だったんだけど、多岐川さんも火曜日は授業無いって言うし、ＴＤＬは休日混むでしょ？　だから予定を繰り上げたの」
「多岐川っていうのがデートの相手か！？　いったいどんな……」

その時インターフォンが鳴った。

「あ、もう来たみたい。じゃ、お母さんいってきまーす」
「気をつけてね。多岐川さんによろしく♪」
「ナニ母さん、そいつの事見たことあんの！？」

のんびり朝食を作り出した母親は、動揺のあまりオロオロしている自分の息子を呆れたようにみやった。

「おととい雛ちゃんをお家まで送ってきてくれたのよ。すっごくカッコイイ男の子でね～」
「母さん、のん気すぎ！　そんなアッサリしてていいのかよ？　自

分の娘だろ！？」
「だからよ。私は雛ちゃんを信用してるもの。それに相手の方は真面目そうな人よ。なんでも院生で、すっごく頭がいいんですって……あ、雛ちゃん、折りたたみ傘持っていきなさい」
「はーい」

雛子が玄関を開けると、そこにはスプリングコート姿の多岐川が立っていた。

「おはよう」
「おはよう多岐川さん、早過ぎ！」
「悪い、待ちきれなかった」

多岐川はさらっと本音をぶつけてくる……雛子は赤面して、それからおずおずと「お弁当作ったよ」と手にしたトートバッグを差し出した。

「嫌いなもの、入ってないといいけど」
「嫌いでも、好きになる」
「え」
「だって、君が作ったんだろう？」

雛子は困ったように、しかし口元をほころばせて「多岐川さん、いつもストレートすぎ」と困ったようにつぶやくしかなかった。照れかくしに先をスタスタ歩いていく雛子に、多岐川は黙ってついていく。

ふと雛子がふり返ると、多岐川は柔らかい微笑を浮かべていた。

「篠田さん」

今度は何を言うつもりだろう、と雛子は内心ドキドキしていた。
多岐川はかなり恥ずかしいセリフも、なんのてらいもなく言ってのけるつわものなのだ。

「チョコレート美味しかった。ありがとう」
「あ、ああうん。食べてくれたんだ」

そっか、と雛子は笑顔を浮かべた。するとスッと身をよせてきた多岐川が、低く柔らかい声音で雛子の耳にそっと囁く。

「ちょっと甘かったけど、また食べさせて……今度は君も一緒に」
「……！」

雛子の次のリアクションに、多岐川はどんな反応を返すだろうか。

（おわり）

エピローグ　（3／19）（後書き）

被験者データ：

――――――――――――――――――――――――――――――

篠田雛子（しのだひなこ）

――――――――――――――――――――――――――――――

18歳。大学文学部所属の一回生。身長153センチ。細身で小柄。過保護な両親と兄に囲まれて育ったので、少し世間知らずなところがある。

髪は瞳の色と合わせて栗色にカラーリングし今時のゆる巻き。さらに今時のカワイイ系の服を着ているが、これらのファッションはシスコン兄・久司のコーディネートによるもの。本当は大人っぽいセクシーなファッションに憧れている（が、できない。似合わないから・笑）

性格は大らかかかつ、わりとマイペース。相手のことを気づかうようでいて、うっかり相手を振りまわしてしまうこともしばしば。

――――――――――――――――――――――――――――――

多岐川睦月（たきがわむつき）

――――――――――――――――――――――――――――――

23歳。大学院理工科生化学研究室所属。身長180センチの細身。院内でも有名な研究フリーク。他人を寄せ付けないオーラがあり、少々エキセントリック。しかし怜悧な美貌とストイックな物腰により、密かに女子生徒の間で人気は高い（が、誰も近づこうとしない……怖いから・笑）

髪はストレートのダーク・ブラウン。時折眼鏡着用。性格は外見通り一見クールだが意外に熱いところもあり、物おじせずに自分の気持ちをストレートに言って相手を困惑させることもしばしば。

サクラ、サクカ？

桜の蕾も膨らんできた今日この頃……深夜、寝静まった篠田家では、長男の部屋で内密な話し合いが行なわれいた。

桜色の可愛らしいルームウェア姿は、篠田家の秘蔵っ子である長女・雛子（ひなこ）。

そして雛子の前には、この部屋の主で重度のシスコン長男・久司（ひさし）が床に座って腕組みしていた。

「つまり、こうなんだな？　その野郎はヒナが一緒にいるにもかかわらず、無礼なことに上の空でいるっていうわけか」

「野郎じゃないよ、多岐川さん。私の彼氏なんだから」

「か、彼氏って、そんな簡単に言うもんじゃない！」

思わず大きな声を出す久司に、雛子はあわてて「声が大きいよ、お兄ちゃん！」と怒ったようにたしなめた。

「ごめんヒナ、怒るなよ、な？」

「ふんだ、ちゃんと彼氏だもん。お付き合い始めたんだから」

「分かった、分かったから」

ひきつった笑顔を浮かべつつ、久司は内心はらわたが煮えくり返る思いだった。

どこの馬の骨か知らないが、カワイイ妹と付き合うとは……しかも妹を悩ませるなんて言語道断。ゆるすまじ、その野郎、もとい多岐川！

「でね、男の子って、女の子のどういうところに魅力感じるものな

の？」
「そうだなぁ……」
「私、女の子として魅力ないのかな」
「な……そんなわけないだろっ！　ヒナはカワイイ。ヒナはどこもかしこも女の子らしいし、俺の自慢の妹なんだからな！　ヒナの魅力に気づかない男なんていないって」
「じゃあ、どうして多岐川さんは手のひとつも握ってくれないの？」

雛子は口をへの字に曲げた。

「いっつも手をつなぐのは私。デートの場所を決めるのも私。最初、多岐川さんって優しい人だなぁって、気を使ってくれてるんだなって思ってたけど、そうじゃないの。多岐川さんから、こうしたいああしたいって、言ってくれたことないんだもん。それに一緒にいても、ちっともいいムードにならないし……」
「いいムードって、どういう意味だ？」
「そのぅ……ほら、カップルがするような事だよ。いちゃいちゃ、するとかさ」
「いちゃいちゃ……」

顔を赤くして一生懸命説明する雛子に対し、久司は目の前が真っ暗になった。
自分のカワイイカワイイ妹が、どうして他の男といちゃいちゃ……昔は「おにーたん」と後ろをついてきたくせに……と、久司はショックをかくしきれない。

しかしカワイイ妹が悩んでいるのだ。力になってあげたい。
てか、雛子の魅力に気づかないその多岐川がおかしい、こんなカワイイ女の子と付き合っていながら、手も握ろうとしないなんてそんな馬鹿な、男としてどこかヤバイんじゃないか？と本気で思い始

める。

「その多岐川って男、ちょっと変わっているんじゃないか？」

「あ、うん。そーだよ。研究室では研究フリークって呼ばれているし」

『やっぱりーーー！！』と久司は頭を抱えてしまった。どうしてそんな変人が、よりによって雛子の初めての彼氏にならなきゃいけなんだ、と久司は恋の女神をうらんだ。

「ね、やっぱりスカートとか短い、セクシー系がいいのかな？　男の人はみんな、そういう色っぽい女の人が好きなんでしょ？」

「ぶっ……ヒナ、お前ね」

「だって、お兄ちゃんも前『やっぱ女の子はミニスカだな』って言ってたじゃない」

「あ、アレは、あくまで俺が女の子とデートする時の、たんに希望に過ぎないだけで……」

久司はしどろもどろに説明をする。が、雛子は一人うなずいて、なにやら納得したように「ミニスカートなんて、持ってたかなぁ」とつぶやいている。

「そ、そんなこと、ヒナがやんなくていーんだよ！　ヒナはそのままで十分だ」

「なによ、お兄ちゃんの役立たず！　ケチ！！　いいもん、教えてくれないなら……お兄ちゃんが持ってる男の子の雑誌を参考にさせてもらうから」

「えっ！？」

「じゃーん♪」

いつの間にか、雛子は久司の『プレ●ボーイ』を手にしていた。

「！！！」

久司は青くなったり赤くなったりと、せわしなく顔色を変える……久司も一応、健全な青年である。２５歳、彼女ナシ。男の子の雑誌を一、二冊隠し持っていたって、誰に責められるいわれは無いハズだ。

ハズだが……まさか最愛の妹にそんなもの見られてしまうとは。

「へー、みんな水着なんだね。あれ、こっちの人はハダカだ」

「わー、ヒナ、雛子！　それ、お兄ちゃんに返しなさいっ！！！」

「わぁ～すごおい、エッチな写真。でもお兄ちゃん、こういうの見るのホントに楽しい？」

「た、楽しいというか……」

「やっぱり男の人って、こういうの好きなのかぁ……でも、私にはハードル高すぎるなぁ」

「あ、ああああたりまえだろうっ！！」

ばっと雛子の手から雑誌を奪い返した久司は、コホン、と咳払いをした。

「わかった……とにかく、ちゃんとその、お前の彼氏と話し合うのがいい」

「話し合うって、どんな風に？」

「付き合って欲しい、って言ったのは向こうの方からなんだろ？じゃあ『私のこと、女の子として魅力あると思っている？』ってはっきりきいてみたらどうだ？」

「えー、直球すぎ……」

工夫ないなぁ、と雛子がつぶやく言葉に、久司はダブルでショックを受けてしまう。
しかし雛子は最後ににっこり笑うと「とにかくありがと、お兄ちゃん」と言って部屋を出て行った。
後に残された久司は、しばらくの間雑誌を手にぼんやりとしていたが、やがて我に返ったようにそれをベッドの下にすべりこませたのだった。

「たーきーがーわ、さーん」
雛子はお弁当を手に、キャンパス内のラウンジで本を手にした多岐川に手を振った。
多岐川は本から目を上げると、相変わらず固い表情のまま指先だけで雛子に応じる。
もう夕方の遅い時間なので、ラウンジは人もほとんどいない。
昼ご飯も、そして下手すると夕食も忘れて研究に没頭する多岐川のために、雛子はこうしてバイトの前に待ち合わせてはお弁当を持ってくるのだ。
「今日は～じゃじゃーん！　たけのこご飯を作ってみました♪　多岐川さん、たけのこ好き？」
「ああ」
「春らしいよね。桜、観に行きたいなぁ。テレビのニュースによるとね、都内でもう満開なんだって」

「そうか」
「桜餅も食べたい。桜の木の下で食べたら、気持ちいいかも。あ、週末に観に行きたいな。多岐川さん、待ち合わせして観に行きませんん？」
「ああ」

そこまで話し続けて、雛子は『しまった！』とばかり口をぱちんと閉じる。
これではいつものパターンである。

雛子は押し黙るようにして、もくもくとたけのこご飯を食べ始めた。隣で同じものを食す多岐川は、そんな雛子の様子をちらりと見やると、ちょっと意外とばかり眉を上げた。

「……」
「……」

無言がつらい、と雛子は再び口を開きかけたが、あわてて閉じるとすましたように再び箸を口に運ぶ。

「……飯」
「え？」

雛子が勢いよく顔をあげると、ちょうど多岐川が手を伸ばしたところだった。

「ここ、ついてる……ほら」

そう言って、多岐川は雛子の口の端からご飯粒を指先ですくい取ると、それをペロリとなめとってしまった。雛子は火がついたよう

に顔を赤くする。

「た、た、多岐川さん」

「何？」

なんてことない様子で再び食事を続ける多岐川に、雛子はくやしいような腹が立つような気持ちでいっぱいになる。

――どうして私ばっかり、こんなに動揺したりドキドキしなくちゃならないの！？

雛子は納得がいかない……『よおし！　週末こそ絶っっ対に、多岐川さんのポーカーフェイスをくずしてやるんだから！　見てなさいよぉ～それで、桜の木の下でラブラブ、いちゃいちゃカップルになってやるんだから！』……雛子はささやかな野望？を胸に、ぐっと両手を握りしめる。

果たして雛子の努力は報われるのか？

がんばれ、雛子……！

（おわり）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5994t/

恋の実験室

2011年7月7日09時49分発行